

# 国際的な視点から見た看護倫理の“今”： 第19回国際看護倫理会議に参加して

*The current status of nursing ethics from an international point of view*

田中美恵子

●東京女子医科大学看護学部

八尋 道子

●佐久大学看護学部

吉田みつ子

●日本赤十字看護大学

2018年9月1日、2日に、アイルランドのコーク大学(UCC: University College Cork)で開催された「第19回国際看護倫理会議(19<sup>th</sup> International Nursing Ethics Conference)」に参加してきた。この度の学会は、「第4回ケアにおける国際倫理会議(4<sup>th</sup> International Ethics in Care Conference)」も兼ねるものであった。主催者は、邦訳『看護倫理』(みすず書房)の著者の一人として知られるジョーン・マッカーシー(Joan McCarthy)博士(コーク大学)と、学術誌『Nursing Ethics』の編集長であり、名古屋で開催された日本看護倫理学会第7回学術集会では、基調講演者として、「尊厳」をテーマにお話くださったアン・ギャラガー(Ann Gallagher)博士(サリー大学)であった。

会場となったコーク大学は、ダブリンから列車で約2時間半、アイルランド第2の都市コークにあり、ビクトリア女王が1845年に設立したというアイルランドの中でも名門の誉れ高い、歴史ある国立大学であり、緑美しいキャンパスが大変印象的であった(写真)。

参加人数は130名前後とこじんまりした集まりであったが、大変和気あいあいとした雰囲気、このフレンドリーな温かさがこの学会の持ち味に違いないと思えた。ヨーロッパからの参加者が一番多かったと思われるが、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど、国際色豊かで、日本からも15名ほどの参加者がおり、会場の中では日本人の集団として結構目立っていたようだ。

今回の学会テーマは、「Gender, Justice and Care」というもので、今日的な課題を捉えたキャッチーかつ刺激的なものであった。こじんまりした学会の割には、スピーカーが大変ゴージャスなものこの学会の特徴かと思われた。今回は、基調講演者として、ミシガン州立大学の名誉教授であり哲学者のヒルデ・リンデマン(Hilde Lindemann)博士を迎え、「Counter to the counterstory: Narrative approaches to nurses' identity」というテーマのもと大変パワフルな講演が

行われた。

リンデマン博士は、ナラティブ倫理、フェミニズム倫理などの分野で多数の著書をもつ著名な学者であり、「カウンターストーリー counterstory」というのは、リンデマン博士の作り出した概念であるとのことであった。氏によればカウンターストーリーとは、「ある社会集団の抑圧を正当化するために用いられている社会的に共有されたナラティブに抵抗する目的で語られるストーリー」と定義されるとのことである。また氏によれば、「社会的に共有されたストーリーは、ある集団のアイデンティティを構成する物語の織物の中に入り込み、そのアイデンティティにダメージを与えながら、そうすることによって、その集団のメンバーが社会で提供されているさまざまなものにアクセスできないようにしている」という。また氏は、「カウンターストーリーは、抑圧的なストーリーを根絶やしにしようとし、もっと正しいストーリーに置き換えようとする。こうすることで、アイデンティティへのダメージが修復されることがある。それが成功するかどうかは、人々に受け入れられるかどうかにかかっている。支配層の多くの人々が、新しいストーリーを受け入れなければならないし、それにしたがって、集団



のメンバーを取り扱わなければならない」と述べる。

カウンターストーリーは、マスターナラティブが間違いであると告発するものであるが、講演では、カウンターストーリーを成功に導くうえで起こってくるいくつかの困難について、看護師のアイデンティティを構成するさまざまなナラティブを例として語られた。殊に支配的社会的階級にある人々が、カウンターストーリーに対抗し、それによって抑圧的な社会秩序を保とうとするために用いる6つのナラティブ戦略(おとぎ話、わらべ歌、絵本、芝居、聖書の物語などのマスターナラティブ)を通して論が展開した。内容は非常に刺激的であったが、難解な部分もあり、詳しく知りたい方は、氏の著作を参照されたい(Hilde Lindemann: *Damaged Identities, Narrative Repair*. Cornell University Press, 2001)。

そのほかに、マーシャ・ファウラー (Marsha Fowler) 博士(サリー大学)とマーク・ラウリー (Mark Loughrey) 博士(コーク大学)による基調講演があった。ファウラー氏は、看護倫理形成の歴史について詳細に語り、ラウリー氏は、博士論文をもとに出版された自らの書をもとに、看護の労働組合運動の歴史を倫理的な観点から考察した。

さらに「看護の価値と専門職教育」のテーマ、ならびに「臨床倫理委員会および医療施設における看護師の役割」のテーマのもとにパネルセッションが行われた。ジェンダー問題も含み大変濃密な内容であり、自由闊達なディスカッションの雰囲気にも感銘を受けた。

もちろん、参加者らの研究発表も行われた。各会場のテーマは、「エンド・オブ・ライフ・ケア倫理」、「臨床実践における倫理」、「認知症ケアにおける倫理」、「高齢者の倫理」、「グローバル倫理」、「倫理と専門職教育」、「倫理と子供」、「良心の問題」であった。日本人の参加者も多数発表をしており、参加者から高い関心を得ていたように思う。どの会場も少人数でこじんまりしており、参加者が皆、かしこまらずに自由な雰囲気でもやりとりしているのが印象的であった。

また何よりも心に残ったのは、「国際人権と看護の賞 International Human Rights and Nursing Award」の授賞式であった。この賞は、コーク大学にある the

Catherine McAuley School of Nursing and Midwifery の the International Care Ethics Observatory から授与されるものであり、看護の分野で人権に対する輝かしい功績と看護実践への貢献をなした人物を称え授与されるとのことであった。今回は、アイルランドの Alice Leahy 氏とスイスの Miriam Kasturza 氏が受賞した。Leahy 氏は、ダブリンで40年以上にわたり、看護師主導でホームレスの人々にシェルターや休息所などのサービスを提供し続けてきた功績により、Kasturza 氏は、国境なき医師団とともに、アフリカの紛争地帯でエボラ出血熱患者などの看護に多年にわたり従事してきた功績によって受賞に至ったとのことであった (<https://www.irishtimes.com/news/social-affairs/alice-leahy-receives-international-human-rights-award-for-her-work-1.3617249>)。このように、倫理的な観点から優れた実践を行ってきた看護師に、学会の場で賞を授与するという場面に立ち会い、感銘を受けるとともに、看護倫理の真髄を再認識する機会にもなった。

1日目の夜には、学会参加者全員が参加できる夕食会があり、地元の青少年少女たちによりアイルランド民謡とアイリッシュダンスが披露された。ダンスは大変な熱気で、最後は参加者らも一緒にダンスの輪に入り踊った。主催者の一人、アン・ギャラガー博士も飛び入りでアコーディオンを演奏され、その腕前に皆が感嘆した。アイルランドの方々のホスピタリティと温かな人柄を感じる楽しい夕べとなった。

全貌を伝えきことは困難であるが、学会ホームページ (<http://inec2018.ucc.ie/>) からは、今回の学会のabstract ( [http://inec2018.ucc.ie/wp-content/uploads/sites/89/2018/08/Book-of-Abstracts-21082018\\_JOC.pdf](http://inec2018.ucc.ie/wp-content/uploads/sites/89/2018/08/Book-of-Abstracts-21082018_JOC.pdf) ) もダウンロードできるし、学会の様式も知ることができるので、関心のある方はぜひ参照されたい。

また来年の学会は、イギリスで開催されるので、興味をもたれた方は学会HPをフォローし、ぜひ来年の学会に参加してください。看護倫理の“今”を国際的な観点から捉えるのに大変よい機会となることは請け合いである。